

校番	57	ホームルーム活動	生徒会活動	学校行事	○	別紙様式
----	----	----------	-------	------	---	------

平成 29 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	広島県立熊野高等学校	校長	山田 哲也	生徒指導主事	沖田 孝之
-----	------------	----	-------	--------	-------

取組事例名 『平成29年度 1年生福祉・介護の現場体験』

取組のねらい『厚みのある多様な人材層の育成』

広島版「学びの変革」アクションプランに従い、「厚みのある多様な人材層の形成」を行うため、実社会とのつながりを重視した体験的な学びを通して、「異文化間協働活動」（各教科，活動で習得した知識やスキルを活用し，答えのない問題から最善策を創造），「課題発見・解決学習」（体験を通して，違いに気づき，多様性を受容するなかでグローバルマインドの涵養や実践的なコミュニケーション力の向上を図る）に係わる力を育成する。この実践力を育成することが，本校の育てたい三つの生徒像（ルールとマナーを遵守し，相手の立場に立って，自ら考え，他者と協働し，主体的に行動することができる生徒。学校行事に積極的に取り組むとともに，自律的な学習者として，メリハリのある学校生活を送ることができる生徒。果敢に挑戦して，自分自身を見つめる視点をあげ，進路目標に向けて，粘り強く努力することができる生徒。）を目指すことにつながる。

取組の具体的内容『職場体験のイメージを持たせて心構えを学び，実践する』

平成 29 年 4 月に，2 年生の昨年の体験発表をから学ぶことを通して，先輩から学び，福祉・介護現場体験のイメージを掴む。

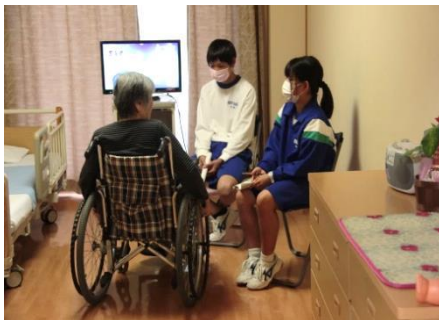
6 月に広島文化学園大学の河野先生の講演を通して，福祉・介護の現場に係わる職場や仕事などの基本的な知識と職場体験をする心構えを学ぶ。

9 月にトリニティ専門学校の吉岡先生の講演を通して，異文化・異年齢の世界である福祉・介護の現場を知り，そこに流れる多様性を受容する心，実践的なコミュニケーションの方法の一端を学ぶ。その後グループ別に事前指導を 2 回行う。

10 月に 3 つのパターンでの「福祉・介護の現場」体験を行い，それぞれが学んだ成果を確認する。

事後指導を通して「あのときはどうすればよかったのか」，「自分たちに足りない知識，スキルは何か」について反省を行う。10 月後半に事後指導のまとめを行い，11 月に 2 回にわたり発表会の準備を行う。それを受けて 12 月の学年発表会につなげる。

現場体験の様子



取組の課題・創意工夫『自己評価』

「福祉・介護の現場」体験への抱負（どんなことを学びたいか、など）を事前にかかせて、体験前の自分を厳しく自己評価させる。（挨拶・返事、言葉づかい、身だしなみ、生活態度、時間厳守、自主性、積極性、協調性、忍耐力の各項目で5段階評価をつける） 体験中の記録は、集中して職員の働く姿や表情、その時の利用者さんたちの様子など、気づきや印象に残ったことをできるだけ記録させておく。体験後は、成果（前向きに取り組めたこと、新たに気づいたこと・感じたこと）と課題（改善していきたいこと、今後の高校生活に生かしたいこと）を書かせ、体験後評価シートで体験後の自分の成長を評価させる。事前に評価した各項目の5段階評価を事後でも行い、事前から事後への自身の変容を理解させて精神的成長を実感させる。事前・実習中・事後の自身の考え方を記録して考えさせることで、自己理解がすすみ将来的な進路決定に向けた方向性を持たせる。

取組の成果（効果）『やりがいを学び、思いやりを知る』

12月の学年発表会は高い評価を得た。発表会のなかでの生徒たちの感想は、「人の世話をする介護と言う仕事の大変さ、やりがいなど普段学ぶことのできないことを学んだ。このことを今後の生活や進路に生かしていきたい」「人を助けるのは仕事としてではなく、思いやりの心が必要であると感じた。今回の体験で相手の思いを知った時の喜びと、人との温もりを感じる事ができたので本当に良かった」「よい笑顔、よい言葉、よい心、これらを互いに大切にしていくことで、信頼関係が築かれていくのだと思った。またこれらの事は私たちの普段の生活でも大切にしなければいけないことだと思った」など自分自身にとって学ぶべきことが多くあった、貴重な体験となったことが多く記されていた。「福祉・介護の現場」のなかで、働いている人たちの姿勢から学ぶ仕事のやりがい、相手を思いやる気持ちの大切さに気づいて、今後の自分自身に生かしていくという思いが強く感じられた、意義のある発表会であった。

学年発表会の様子



今後の展開『次なる目標へ』

この体験活動を通して、「きっかけ」を与え、2年生でその体験をもとに「自分たちで体験を企画し実行する」（インターンシップ、各大学で行われる高大連携授業、研究機関主催のサイエンスキャンプ等への参加）実行力を育成し、3年生ではその集大成としての進路選択を行えるように導いていく。

他校へのアドバイス『自己肯定感』

体験を受け入れていただく施設は、熊野高校から近い場所にある。そこに就職する生徒もおり、進路を考えるうえでも重要な体験となっている。また1年生のうちこのような職場体験をさせることは、新たな発見を促して自身の可能性を知ることとなり、そこから自己肯定感を高めていくきっかけが生まれ、「学びの変革」の取り組みが目指すものと重なっていくものとなる。